

## フローベール『三つのコント』と「オリエントのコント」

大橋 絵理

長崎大学大学教育機能開発センター

### Flaubert's *Trois contes* and *Conte oriental*

Eri OHASHI

Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University

#### Abstract

*Trois contes* are the only tales in Flaubert's work. But when he was young, he spoke repeatedly of his plan to write the oriental tale in his letters and he wrote the draft, *Les Sept fils du Derviche : le conte de desert*. In view of that, we will explore the relation of these two tales. At first, we find that Flaubert wrote the first version of a novel *La Tentation de Saint Antoine* just before *Les Sept fils du Derviche*, and *La Tentation de Saint Antoine* before *Trois contes*. So this visionary story is considered to have affected two tales. In addition to that, some characters in *Les Sept fils du Derviche* are seen in each tale of the *Trois contes*. For example, Saint Julian is similar to Iban who is a spirituarist. From the viewpoint of bourgeois life, the family of Aubain in *Un cœur simple* is analogous to that of Zein, and Aulus, roman emperor as famous devourer in *Hérodias* to Hassan. Given the above points, we can consider that *Trois contes* aren't the small sketches suddenly written for the reason that Flaubert couldn't continue writing his grand roman, *Bouvard et Pecuchet*, but that they belong to the school of the works as *La Tentation de Saint Antoine* and *L'Education sentimentale*, to which he applied his whole life.

Key Words : Flaubert, *Trois contes*, *Conte oriental*, Manuscript

#### 1. はじめに

『三つのコント』はフローベールの作品の中でひとつの大きな特徴を持っている。それは、他のフローベールの刊行作品はすべて長編であるにもかかわらず、『三つのコント』だけがコント形式であるという点である。しかし実はフローベールがコント執筆の構想を抱いたのは、『三つのコント』だけではなかった。本論では、コントという視点から『三つのコント』と未刊行草案の関連について分析していきたい。

#### 2. オリエントのコント

マリー＝ジャンヌ・デュリーは『フローベール

と未刊行草案』の「カルネ 1 : 旅行ノート、1845年4月～5月」の中で「オリエントのコント」とタイトルが付けられた f° 55v° と f° 56r° を紹介し、マキシム・デュ・カンが『文学的回想』で書いた言葉を引用している<sup>1)</sup>。

この時（法律を学んでいた時期）ギュスターヴは将来執筆したい2つの作品を夢見ていた。その作品の構成の方が、法律の勉強よりもずっと彼の心を占めていた。二つの中のひとつはオリエントのコントであったが、その全体像をまだ掴みきれてなかった。<sup>2)</sup>

その後実際フローベールは、『イスラム教修道僧の

7人の息子：砂漠のコント』<sup>3)</sup>とタイトルを付けたオリエンを舞台としたコントの草稿を書いたのである。ジャン・ブルノーは『フローベールのオリエンのコント』<sup>4)</sup>の中で、19世紀全般のヨーロッパのオリエン観、フローベールのオリエン観、さらに「オリエンのコント」の構想の過程と『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』の草稿を詳細に分析している<sup>5)</sup>。

いかにフローベールがオリエンを舞台としたコントというアイデアに魅せられていたかは、書簡を見ると明白である。彼が最初にこのコントについて語ったのは1845年5月13日のアルフレッド・ル・ポワトヴァン宛ての書簡であった。

僕はずっとオリエンが舞台のコントのことを考えている。次の冬には書こうと思う。[...]ブリュゲルの『聖アントアヌの誘惑』の絵を見た。『聖アントアヌの誘惑』を戯曲にアレンジしたらどうかという考えが浮かんだ。<sup>6)</sup>

この書簡から、ジャン・ブルノーは、フローベールは1845年の4月あるいは5月に「カルネ1」の「オリエンのコント」に関する2ページを書いたのではないかと推測している。

このプランはフローベールの心を捉え、1845年9月16日にもアルフレッド・ル・ポワトヴァン宛てに「僕は少し僕のオリエンのコントの整理に専念してみよう。だが骨が折れる」<sup>7)</sup>と書いている。しかし1846年4月7日には「僕のオリエンのコントは来年に延期だ。おそらくは再来年、永遠にかもしれない」<sup>8)</sup>とマキシム・デュ・カンに語っている。このようにフローベールはオリエンのコント執筆を一度あきらめるが、再度、1846年8月12日にはルイーゼ・コレへ「僕について言うと、少しギリシャ語を勉強しています。僕のオリエンについての研究を継続し、18か月前から思いをこらしているオリエンタルのコントを書く助けとなるようシャルダンの旅行記を読んでいます」<sup>9)</sup>と書き送る。その後、彼の関心は、完全に『聖アントアヌの誘惑』へと移行し、結局「オリエンのコント」は執筆されるには至らなかった。

しかし、1845年から1849年にわたって書かれ

たと考えられる「カルネ3」<sup>10)</sup>の中には、『聖アントアヌの誘惑』に関するノートと混在して、「オリエンのコント」のフォリオが見られる。例えば、f° 9v° と f° 10r° はオリエンに関する旅行、文化、歴史の書籍のリストとなっている。次いで同カルネの f° 41r°, f° 41v°, f° 40r°, f° 40v°, f° 39v°, f° 39r°, f° 38v°, f° 38r°, f° 37v° は「オリエンのコント」の草案であるがおそらく1845年の9月の秋か1849年に執筆されたのではないかとピエール＝マルク・ド・ビアジは推測している<sup>11)</sup>。

その後1849年11月から1851年5月までフローベールはオリエン旅行をするが、その旅行中、ルイ・ブイエへ「僕はオリエンのコントについて何か書いてみようと思ったけれども無駄だった。こここのところ2日間ずっとヘロドトスのメンカウラーの話について考えていた（このファラオは娘と近親相姦をしたんだ）」<sup>12)</sup>と語っている。この書簡から、フローベールは完全に「オリエンのコント」をあきらめたわけではなかったことが見てとれる。さらに注意すべきは、この日にブイエへ有名な娼婦のクシウク・ハーネムの家を訪れたことを報告している点であろう。なぜなら『三つのコント』はオリエンの女性なしには語る事ができないからである。例えば、伝説ではジュリアンの妻は西洋の女性で寡婦であるが、フローベールはあえてジュリアンの妻の母親をオリエンの女性とし、ジュリアン夫妻は妻が母から譲りうけたオリエン風の館<sup>13)</sup>に住むように物語を変更した。さらに『ヘロディアス』のサロメの服装およびダンスは、フローベールがオリエン旅行で出会ったクシウク・ハーネムを始めとする女性達からインスピレーションを受けたと考えられている<sup>14)</sup>。だがオリエン旅行から帰国したフローベールは、1851年9月に『ボヴァリー夫人』の執筆を開始し、「オリエンのコント」はしばらく書簡で話題にのぼらなくなる。

しかし、『ボヴァリー夫人』を執筆中の1853年6月28日にルイーゼ・コレへ「もし神が僕に命を与えてくれるなら、僕は二つの作品を準備するだろう。一つはオリエンのコントだ」<sup>15)</sup>と再び語るのである。その後も何度かこのコントについて言及し、1854年の8月にルイ・ブイエへ「僕は汗

をかき、唾をのみこみながらウォルター・スコットの『海賊』を読んだ。とても美しい、でも長すぎる。しかし、少なくとも僕を興奮させた。そして今や僕はオリエントのコントについてものすごく考えている<sup>16)</sup>と述べるが、それを最後にこのプランについて語ることはなくなった。結局ジャン・ブルノーは、フローベールは「オリエントのコント」のプランを1845年から1849年と1853年から1854年の2つの期間で練っていたのではないかと推測している<sup>17)</sup>。

### 3. 二つのコントの共通点

もちろんフローベールが、1876年から書き始めた『三つのコント』をこの「オリエントのコント」の構想と関連づけて語ったことは一度もない。しかし二つのコントの執筆時の状況、あるいはカルネや草稿を比較すると、これらがいかなる関係も持っていないとは言いきれないと考えられる。

まず執筆時の状況を見てみよう。先に見た1845年5月13日のアルフレッド・ル・ポワトヴァン宛ての書簡では、「オリエントのコント」と同時に初稿『聖アントワーヌの誘惑』の構想を語っており、その後フローベールは1848年に初稿『聖アントワーヌの誘惑』の執筆を開始している。また、初稿『聖アントワーヌの誘惑』の中にもオリエントの神々が多く出現することから、「オリエントのコント」と初稿『聖アントワーヌの誘惑』はフローベールの中では近いものであったと推測できる。事実彼は1853年8月23日にルイ・ブイエに対して「僕はインド、中国、僕のオリエントのコントについて考えている」<sup>18)</sup>と述べているが、『聖アントワーヌの誘惑』の舞台も中国やインドまで及ぶのである。

それでは『三つのコント』はどうだろうか。まさに『三つのコント』の直前に書かれた作品は『聖アントワーヌの誘惑』であった。また「カルネ 16 bis」は『聖アントワーヌの誘惑』に関するものであるが、その時期とほぼ同時に書かれたと推測される『ヘロディアス』に関するフォリオもその中に混在している。この件に関してはピエール＝マルク・ド・ビアジが「ここでは、『ヘロディアス』の文献収集が『聖アントワーヌ』執筆の期間から

始められた可能性が強いということであることを強調するにとどめよう<sup>19)</sup>と述べている。

以上の点から『ブヴァールとペキュシェ』が執筆困難になった時、その直前に書かれていた『聖アントワーヌの誘惑』が『三つのコント』執筆の動機の一要因になったという可能性が考えられるだろう。

さらに、「オリエントのコント」と『三つのコント』の関係は『聖アントワーヌの誘惑』との結びつきだけではなく、登場人物や内容にも及ぶ。「オリエントのコント」の構想を抱いていた時、フローベールはヘロドトスの『歴史』に非常に関心を抱いており、「カルネ 3」にも多くのメモを残している。その中で1845年の7月頃に書かれたと推測されている f° 4 に、フローベールは「ヘロドトスの時代には、北方の国、スキタイ、雪の国々、太陽の光が届かない白い地方、そこに黄金を見張るグリフォンが置かれていた」<sup>20)</sup>というメモを取っている。

この文章は、聖ジュリアンが多くの鷹の中から一羽選んで狩猟に連れていった鷹の描写と類似している。「お伴の鷹はたいていいつも雪のように白いスキタイの大鷹であった。[...] 青い足には金の鈴が震えていた」<sup>21)</sup>。グリフォンは、上半身は金色の鷲で下半身は白いライオンという伝説上の動物で、鋭い鉤爪で牛や馬を数頭掴んで飛んだとも言われている。ジュリアンのスキタイの大鷹も白い身体に金色の飾りをつけており「鳥や獲物を引き裂く」のである。『聖ジュリアン伝』でフローベールが狩猟するジュリアンの分身として登場させた鷹にスキタイ種を選択したのは、「オリエントのコント」に関するノートが頭にあったからだと考えられないだろうか。

さらに、「カルネ 3」と同時期に書かれたと推測される『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』の草稿を見てみよう。ジャン・ブルノーはこの草稿について次のように語っている。

「オリエントのコント」がもたらした富は、フローベールの作品において非常に重要なものであった。一方では歴史的作品の大部分、正確には古

代オリエントというジャンル、つまり『聖アントワヌの誘惑』、『サランボー』、『ヘロディアス』は、そこから生まれた。他方、偉大な哲学的な小説『聖アントワヌの誘惑』、『ブヴァールとペキュシェ』もそこから生まれたのである。<sup>22)</sup>

ただしジャン・ブルノーは『ヘロディアス』の題名をここであげているものの、他の作品の方に重きを置いており、『ヘロディアス』と「オリエントのコント」との関連性を重視してはいない。だが、『三つのコント』と『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』の草稿との間に具体的な関係は見いだせないのだろうか。

このコントでは7人の兄弟がそれぞれ異なった体験をすることになっており、f° 9v° では各登場人物の性格が示されている。その兄弟の一人は「イバン・ナサライ(心霊主義者—祝福の中での呪い)」と記されている。これは、『聖ジュリアン伝』でジュリアンが誕生した時に母親が息子は聖人となるという予言を聞き、その運命がジュリアンに対する鹿の「親殺し」の呪いに結びついていくという、フローベールが本来の伝説に付加して創作したエピソードを彷彿とさせる。また、f° 7r° では、「イバンは医者の手伝いを始め、薬物で医者を助ける。[...] しかしイバンは「原因」を知りたいと願った。[...] それで彼は様々な宗教における抽象観念の頂点の場を渡り歩いた。禁欲主義、神の愛」と書かれている。もちろん彼は聖アントワヌの人物像に近いと考えられるが、同時に妻から離れ、病人を看病し、最後はキリストの救済によって天に昇る聖ジュリアンの人物像にも当てはまる部分があると言えるだろう。

さらに、f° 9v° で名前があがった兄弟の一人であるエルムズンは、f° 5r° でヴィジョンを見る。「エルム。墓の中の戦士たち、狩猟。武器は個人の体の一部とさえなっており、体から離すことができない」。『聖ジュリアン伝』の1部で、ジュリアンは狩猟をし、2部では武器を携え戦士となりその功績から皇帝の娘を娶とる。つまり、聖ジュリアンはイバンとエルムズンを統合した人物に類似しているのである。

さて次の、『まごころ』はノルマンディー地方が

舞台であり、「オリエントのコント」とは無関係なように見える。しかし、フローベールは、オリエントに関する物語を描くにあたって、必ずしもオリエントという空間だけに留まるつもりはなかった。f° 9v° で、彼は7人の兄弟の一人イブラハムを、「[イブラハム] ゼイン、ブルジョワ、常識、狭量な望み」と特徴づけている。もちろん「ブルジョワ」はフローベールと同時代のフランス社会を象徴する19世紀に誕生した言葉である。イブラハムを表現するのに「ブルジョワ」という言葉を使用したことから、フローベールがオリエントのコントに近代ヨーロッパの世界を混入しようとした意図が見て取れる。

さらにf° 5r° では、ゼインについて次のように書かれている。

他の人達がゼインに会うたび、ゼインは不幸や事故に見舞われている。—しかし新たな希望—妻に—子供に— [...] ゼインの凝り固まった信心—兄弟たちは彼を馬鹿にし、彼は兄弟たちを馬鹿にする。ゼインは物語の中でほとんど行動しない。様々な人物が彼の家の前を次々に通り過ぎる。

ゼインは他の兄弟とは異なって妻や子供という家族中心の生活を送っており、このような典型的なブルジョワ家庭の様子は『まごころ』の舞台のオーバン家と類似している。さらに他の兄弟たちが様々な行動を起こす中、ゼインだけが固定した生活を送り、他の人物達が「彼の家の前を通り過ぎる」という文章は、『まごころ』の次のような文章を想起させる。

いつの年も変わりなく、復活祭や聖母被昇天の祝日や諸聖人の祝日と、主だった祝祭日のいくたびか繰り返し巡ってくるほかにはまた別段話もなかった。[...] たとえば、1825年には、ペンキ屋が二人来て玄関の塗り替えをやっていった。

またf° 4r° では、「打ち負かされたエルムズンは息子をなくしたばかりのゼインの家の前を通った。一人は自分の町のために泣き、もう一人は息子のために泣いた」と書かれている。子供の死は

『まごころ』の重要なテーマでもある。事実オーバン夫人は娘を亡くすし、オーバン家の女中フェリシテも息子同様に愛情を注いでいた甥を亡くするのである。このような一致は単なる偶然とは言えないのではないだろうか。

それでは最後に、『ヘロディアス』との関係を探ってみよう。『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』のp 7r<sup>o</sup>には踊り子が登場する。「スルタンの騎馬槍試合の時に、ラシチャを踊り子と曲芸師として登場させる。— 彼女は蛇、ライオンを操る。そして剣と花の上でダンスをする」。踊り子の存在はもちろんヘロドの誕生日の饗宴の際に踊ったサロメと重なるが、同時に、「ライオン」を操る様子は、「二頭のライオンを従えた女神キュベレ」<sup>23)</sup>に似たヘロディアスも想起させる。

さらに、『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』の草稿には次のような女性も出現する。「総督の妻 / 不実な性格 — 意地悪 — 力づくで奪われた、エメルズンを愛する — 総督の愚直さ — 彼女は総督を殺しエルクムズンを解放した」。この不実な女性は、自らが権力を握るために夫を裏切り、アンティパスを誘惑し、妻になったヘロディアスに類似している。

最後に7人の兄弟の中のハッサンに注目してみよう。p 9v<sup>o</sup>でハッサンは「[ハッサン] ~~アリ~~。金。強情、追剥で商人、裕福、時代遅れの策略家、奴隷が何度も逃亡する。[...] [アリ] ハッサン 官能的、非常に女性から愛される しかしワインの方を好む、美食家」と特徴づけられている。もちろん後のローマ皇帝となるアウルスは「追剥で商人」ではないが、女性よりもワインに興味を持つ姿は、『ヘロディアス』に登場するやいなやワインを飲み干し、他の人物たちがサロメの踊りに恍惚となっている中、眠り続けるアウルスの姿と重なり合う。

p 5r<sup>o</sup>で兄弟達が見る幻影は、各兄弟の特徴を象徴しているが、ハッサンのヴィジョンは次のようなものであった。

ハッサン。食べる人々[~~むさぼり食べる~~]。非常に大きなテーブルで人々はずっと食べ続けている。エメラルド色のワイン、向こう側のテーブル

の端が見えない。遠くから潮騒が聞こえるように、遠くからざわめきが聞こえる...不気味な食食。彼らは食べて、食べ続ける。

ハッサンが見る幻影は、歴史上有名でもあるアウルスの食欲に通じていると言えるだろう。実際『ヘロディアス』においてもアウルスの食欲は強調されている。ヘロドの城内の厨房で山と積まれた食べ物を見て、「アウルスはこれらを見てたまらなくなった。後年世界を驚嘆させたあの大食いの衝動に駆られて、アウルスは厨の方に駆け出した」<sup>24)</sup>。またヘロドの誕生日の饗宴の場では、食べ過ぎて嘔吐した後、次のように叫ぶ。「おい、なんなりと持ってまいれ、大理石の屑、ナクソスの雲母、海の水、何でも食うぞ」<sup>25)</sup>。フローベールが史実を変更してまでも、『ヘロディアス』に登場させたアウルスの原型の一つは『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』のハッサンでもあるとも推測できるだろう。

以上のように、「オリエントのコント」の草稿と『三つのコント』との間には「コント」という形式以外にも登場人物やエピソードに共通点を見出すことができると言える。

この『イスラム教修道僧の7人の息子：砂漠のコント』は実際に完成されることはなかったが、フローベールが『三つのコント』執筆後の1977年に次のような計画を語っていたことは興味深い。

もし私をもっと若く金を持っているのなら、現代のオリエント、スエズの東部地峡を研究するために、またオリエントへ戻ってみたいところです。オリエントを巡る大著を書くことが昔からの夢なのです。私は野蛮化する文明人と、文明化する野蛮人を書きたと思っています。そして最後には融合してしまう二つの世界の対照の有様を展開したいと思っています。<sup>26)</sup>

もちろん1880年に亡くなったフローベールはこの雄大な作品を執筆することはなかった。

## 4. おわりに

フローベールは青年期の未刊の初稿『感情教育』や初稿『聖アントワーヌの誘惑』を後に書き換え、『感情教育』や『聖アントワーヌの誘惑』という円熟した作品として刊行した。「オリエントのコント」の構想の諸要素を、『三つのコント』の中に見いだせるということは、『三つのコント』は、従来考えられていたように『ブヴァールとペキュシェ』執筆不能の状態から突然書き出された小品ではなく、先の二つの作品と同系の流れに属し、もしフローベールが『ブヴァールとペキュシェ』執筆後に時間があれば、さらなる大作へと結びついていった可能性も秘めた作品であったと考えることはできないだろうか。

- 
- 1) Marie-Jeanne Durry, *Flaubert et ses projets inédits*, Paris, Librairie Nizet, 1950, p. 121.
  - 2) Maxime du Camps, *Souvenir littéraire*, Paris, Librairie Hachellte, 1892, tome 1, pp. 230-231.
  - 3) フランス国立図書館のサイト Gallica で草稿を閲覧できる。  
(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000627d.r=1angEN>)。これらの 11 枚の草稿は 32cm×20cm の本の形式に綴じられており、オリジナルはフランス国立図書館の草稿部門にある (Gustave Flaubert. *Œuvres de jeunesse (1<sup>re</sup> série)*, XVIII, *Les Sept fils du Derviche*, NAF 14152)。
  - 4) Jean Bruneau, *Le « Conte oriental » de Flaubert*, Paris, Denoël, 1973.
  - 5) ジャン・ブルノーは、フローベールが書簡の中で「オリエントのコント」について何度も語っているが、実際に「オリエントのコント」というタイトルを付けた作品はなかったと指摘している。そしてその作品のタイトルは『イスラム教修道僧の7人の息子』、副題として『砂漠のコント』にしようと考えていたのではないかと推測している (*ibid.*, p. 119)。
  - 6) Gustave Flaubert, *Correspondance I (janvier 1830 – juin 1851)*. Édition présentée, établie, et annotée par Jean Bruneau, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 230.
  - 7) *Ibid.*, p. 253.
  - 8) *Ibid.*, p. 263.
  - 9) *Ibid.*, p. 296.
  - 10) Pierre-Marc de Biasi, *Carnets de travail*, Paris, Balland, 1988, pp. 127-151. 「カルネ 3」には全部で41枚のフォリオがある。
  - 11) *Ibid.*, p. 127.
  - 12) Flaubert, *Correspondance I*, op. cit., p.601. 1850年3月13日、ルイ・ブイエ宛。
  - 13) 「それは岬の丘に、オレンジの林に囲まれて、モール風に建てられた白い大理石の宮殿だった」 (Flaubert, *Trois contes*, introduction et notes par Pierre-Marc de Biasi, Le livre de poche « classique », 1999, pp. 110-111)。
  - 14) ピエール＝マルク・ド・ビアジは『三つのコント』の前書きで、フローベールが出会ったエジプトの二人の娼婦クシウク・ハーネムとアジザーの踊りがサロメの踊りに影響を与えたと指摘している。特にアジザーの踊りはヨカナンの「斬首」をイメージさせるサロメの踊りのポーズの起源となったと考えている (Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 35 参照)。工藤庸子、『サロメの誕生：フローベール/ワイルド』、新書館、2001年、28-32頁参照。
  - 15) Gustave Flaubert, *Correspondance II (juillet 1851 – décembre 1858)*. Édition, établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1980, p. 367.
  - 16) *Ibid.*, p. 564. 1854年8月7日、ルイ・ブイエ宛。
  - 17) Jean Bruneau, *Le « Conte oriental » de Flaubert*, op. cit., p. 93.
  - 18) Flaubert, *Correspondance II*, op. cit., p. 412.
  - 19) Pierre-Marc de Biasi, *Carnets de travail de Flaubert*, op. cit., p. 602.
  - 20) *Ibid.*, p. 134.
  - 21) Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 100.
  - 22) Jean Bruneau, *Le « Conte oriental » de Flaubert*, op. cit., p. 205.
  - 23) Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 170
  - 24) *Ibid.*, p. 148.
  - 25) *Ibid.*, pp.165-166.
  - 26) Gustave Flaubert, *Correspondance V (janvier*

1876 - mai 1880). Édition présentée, établie, et annotée par Jean Bruneau et Yvan Leclerc, avec la collaboration de Jean-François Delesalle, Jean-Benoît Guinot et Joëlle Robert, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 324. 1877年11月10日、ロジェ・デ・ジュネット夫人宛。